



Title	地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：第2章 日本人住民の地域生活
Author(s)	菊地, 千夏
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 22, 15-29
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22665
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P15-29.pdf



第2章 日本人住民の地域生活

はじめに

われわれは『外国人居住者との交流と意識に関する実態調査』という題目で、大泉町の日本人住民を対象としたアンケート調査を実施した。質問紙は1999年における同調査結果と比較しやすいように、意識的に項目を設定し、6年間の住民の意識や生活の変化を把握することも目的のひとつに加えた。

調査の対象となる住民は、2005年6月に大泉町選挙人名簿抄本より無作為に系統抽出したのち、8月上旬に調査票の郵送をおこなった（配布数1,507）。その結果、有効回収数が540、有効回収率は35.8%であった。1999年調査では配布数1,505、有効回収数465、有効回収率30.1%であったので、両調査における対象者数規模の違いはほとんどないといえるだろう。また、有効回収540票のうち、聞き取りの協力が得られたのは24名（男性17、女性7）であり、9月23～29日の間に、それぞれの自宅を訪問するかたちで、別の質問紙に基づいてインタビュー調査を実施した。

第1節 調査対象者の基本属性と生活履歴

対象者の性別および年齢は表2-1のような構成となり、男性48.2%、女性51.8%であった。平均年齢は51.02歳で、1999年調査時平均の48.91歳よりやや高くなっている。町全体の人口構成と比較すると、男女とも20代、30代が町全体を下回り、40代以上が町全体を上回っていることから、町全体よりもやや中高年層の割合が高いサンプルとなっている。しかし、全体として町全体の性別・年齢別構成とそれほど大きくは異なっていないことから、この結果は、大泉町全体の特徴を把握する上で有効であるとみなしてよいだろう。

表2-1 調査対象者の性別・年齢別構成

	実数			構成比			町全体		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
20～29歳	22	38	60	8.6	14.0	11.4	23.5	17.5	20.6
30～39歳	35	38	73	13.7	14.0	13.8	20.8	18.3	19.6
40～49歳	46	49	95	18.0	18.0	18.0	16.9	17.7	17.2
50～59歳	66	59	125	25.9	21.7	23.7	20.1	20.7	20.4
60～69歳	59	59	118	23.1	21.7	22.4	11.2	12.2	11.7
70～79歳	26	29	55	10.2	10.7	10.4	5.5	8.9	7.1
80歳以上	1	0	1	0.4	0.0	0.2	2.0	4.7	3.3
合計	255	272	527	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(注) 町全体は2000年国勢調査より作成。サンプリング段階では20～79歳までを対象としたが、調査票の回収までに満80歳を迎えた男性1名が含まれている。

出身地に関しては（表2－2参照）、「大泉町」出身者が35.9%、その他の「群馬県内」出身者が23.1%と、いわゆる「地元」出身者で過半数以上を占めていることがわかる。また、「大泉町」出身者のうち、現住所が出生地である者は95名（男性61、女性34、計18%）であり、このことから、「地元」出身者であっても、現在の住所に定着するまでに、転居経験のある者が全体の4割いることがわかる。

次に、表2－3で大泉町への転入世代をみると、「自分の代」が全体の46.1%を占め、これは「祖父母より前」に該当する者の約2倍に該当している。これら二つのデータによれば、約5割近くの住民が、出生時からずっと大泉町に住み続けているわけではなく、大泉町以外での居住を経験していると考えられる。すなわち、ここから、大泉町が、外国人のみならず日本人住民においても、町への流入が比較的多いことを確認することができる。

表2－2 性別・年齢別・出身地別構成

性別		大泉町	群馬県	関東	その他国内	外国	合計
男	20～29歳	11	0	6	4	1	22
	30～39歳	13	10	5	7	0	35
	40～49歳	19	7	10	10	0	46
	50～59歳	27	10	10	18	1	66
	60～69歳	26	7	10	14	2	59
	70～79歳	12	7	3	4	0	26
	80歳以上	0	1	0	0	0	1
	小計	108	42	44	57	4	255
女	20～29歳	22	6	5	5	0	38
	30～39歳	12	7	12	7	0	38
	40～49歳	10	19	11	9	0	49
	50～59歳	13	19	16	11	0	59
	60～69歳	16	19	15	7	2	59
	70～79歳	8	10	7	3	1	29
	小計	81	80	66	42	3	272
合計	189	122	110	99	7	527	
(構成比)		35.9	23.1	20.9	18.8	1.3	100.0

表2-3 性別・年齢別現住地転入世代

性別		自分の代	親の代	祖父母の代	祖父母より前	N・A	合計
男	20～29歳	9	5	4	2	2	22
	30～39歳	21	1	4	9	0	35
	40～49歳	19	9	6	11	1	46
	50～59歳	32	14	4	15	1	66
	60～69歳	30	12	3	14	0	59
	70～79歳	12	7	2	5	0	26
	80歳以上	1	0	0	0	0	1
	小計	124	48	23	56	4	255
女	20～29歳	5	13	13	6	1	38
	30～39歳	21	3	6	6	2	38
	40～49歳	24	9	3	10	3	49
	50～59歳	30	4	3	22	0	59
	60～69歳	28	13	7	9	2	59
	70～79歳	11	6	4	6	2	29
	小計	119	48	36	59	10	272
合計	243	96	59	115	14	527	
(構成比)	46.1	18.2	11.2	21.8	2.7	100.0	

表2-4 性別・年齢別学歴

性別		義務教育	高校	専門学校	短大・高専	大学以上	N・A	合計
男	20～39歳	0	19	5	2	30	1	57
	40～59歳	8	53	11	5	32	3	112
	60歳以上	20	50	2	4	9	1	86
	小計	28	122	18	11	71	5	255
女	20～39歳	0	23	19	18	16	0	76
	40～59歳	6	43	30	22	7	0	108
	60歳以上	25	48	6	4	2	2	87
	小計	31	114	55	44	25	2	271
合計	59	236	73	55	96	7	526	
(構成比)	11.2	44.8	13.9	10.5	18.3	1.3	100.0	

(注) 義務教育は旧制高等小学校を含む。高校は旧制中学校、高等女学校、師範学校を含む。
専門学校は専修学校も含む。短大・高専は旧制高校を含む。

表2-4から対象者の最終学歴をみると、まず全体では、高卒までとそれ以上の進学者（専門学校、短大・高専および大卒）がほぼ5：5の比率となっており、大卒以上は2割弱である。男女別では女性の専門学校および短大・高専卒の割合が高く、これは男性の約3倍であるが、大学進学者は男性のほうが圧倒的に多く、女性のその約3.5倍にあたる。40歳以上では、男女ともにそのような傾向をみてとれる。39歳以下では、男女ともに中卒者がいないのが特徴的であり、この世代では大卒以上が3割を超えている。

次に、表2-5-1は対象者の職業階層を表している。住民の7割が有職者であり、男性の8割、女性の6割が何らかの職業に就いている。そのうち、雇用労働者が全体の4割を占めており、3：2の比率でホワイトカラー層がブルーカラー層を上回っている。男女別では、ブルーカラー層の男性は同層女性の約3倍であり、男性だけでみると、ホワイトカラー、ブルーカラーがほぼ同じくらいの割合である。女性の無職層の多さはここに主婦專業が含まれるからであり、主婦專業だけで無職層の8割を占めている（女性全体では3割を占める）。

表2-5-2でさらに細かく職業をみると、男女でまったく異なった構成を示しており、男性は鉱工運通業が4割、次いで専門・技術職と販売・サービス業がそれぞれ2割弱となっている。男性対象者の平均年齢世代（50～59歳）では、管理職従事者が2割を占める。一方、女性の有職者はアルバイトを含むパート・臨時が3割と最も多く、次いで販売・サービス業従事者が3割に満たない割合を占めている。また、男性と比べて女性の専門・技術職および管理職従事者は非常に少なく、合わせて4.1%である。

表2-5-1 性別・年齢別職業階層（5分類）

性別		自営業	ホワイトカラー	ブルーカラー	パート他	無職	その他	合計
男	20～29歳	1	5	8	1	4	2	21
	30～39歳	5	15	13	1	0	1	35
	40～49歳	6	18	20	0	1	1	46
	50～59歳	11	22	20	1	7	5	66
	60～69歳	14	13	5	4	18	5	59
	70～79歳	6	0	0	0	16	4	26
	80歳以上	0	0	0	0	1	0	1
	小計	43	73	66	7	47	18	254
女	20～29歳	1	14	7	9	6	1	38
	30～39歳	1	13	4	5	14	1	38
	40～49歳	3	14	5	17	9	1	49
	50～59歳	9	11	5	15	16	3	59
	60～69歳	11	6	0	3	33	5	58
	70～79歳	4	0	0	1	20	4	29
	小計	29	58	21	50	98	15	271
合計	72	131	87	57	145	33	525	
(構成比)		13.7	24.9	16.6	10.9	27.6	6.3	100.0

(注)「ホワイトカラー」には専門職、管理職、事務職、販売職の非雇用、「ブルーカラー」には熟練職、半熟練職、非熟練職の非雇用を含む。

表2-5-2 性別・年齢別職業階層（職業別）

性別		専門・技術	管理	事務	販売・サービス	鉱工・運輸	農林漁業	家族従事	パート・臨時	無職	その他	合計
男	20～29歳	6	0	0	1	8	0	0	1	4	0	20
	30～39歳	11	0	3	2	16	0	1	1	0	0	34
	40～49歳	9	5	3	7	19	1	0	0	1	1	46
	50～59歳	7	12	5	10	20	0	1	1	7	0	63
	60～69歳	2	4	2	12	10	2	1	4	18	2	57
	70～79歳	0	0	0	2	1	3	0	0	16	1	23
	80歳以上	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
小計	35	21	13	34	74	6	3	7	47	4	244	
女	20～29歳	2	0	6	9	4	0	1	9	6	1	38
	30～39歳	2	1	5	6	3	0	1	5	14	1	38
	40～49歳	0	1	8	7	6	0	1	17	9	0	49
	50～59歳	2	0	5	11	3	0	5	15	16	0	57
	60～69歳	1	1	0	11	0	0	5	3	33	1	55
	70～79歳	1	0	0	1	0	2	1	1	20	0	26
	小計	8	3	24	45	16	2	14	50	98	3	263
合計	43	24	37	79	90	8	17	57	145	7	507	
(構成比)	8.5	4.7	7.3	15.6	17.8	1.6	3.4	11.2	28.6	1.4	100.0	

(注) 職業は左より、専門的・技術的職業従事者、管理的職業従事者、事務的職業従事者、販売・サービス業従事者、鉱工・運輸業従事者、農林漁業従事者、家業手伝い、パート・アルバイト・臨時、無職（主婦・学生含む）、その他（N・A含む）。

対象者個人の年間収入に関しては、男女を合わせると200万円以下が26.9%と最も多く、400万円以下の低所得階層が46.4%と半数を占めている（表2-6参照）。このうち、男性では200～800万円の間で過半数が分布し、女性においては圧倒的に200万円以下が高い割合を占めていることがわかる。次に、世帯全体の収入では（表2-7）、200～1000万円の間で平均的な分散がみられ、1000万円以上の高所得階層が1割いることがわかる。また、表2-7からは対象者の家族形態をみることもできるが、核家族世帯が6割以上、二世帯同居および三世帯同居世帯が2割以上を占めている。

では、このような地域住民たちの日常的な近隣との交流の中においては、どのような特徴がみられるのだろうか。これまでみてきた属性や生活史の違いは、交流の仕方に反映されているのだろうか。次節では、周囲に外国人が在住する中で、まずは日本人住民同士でどのような関係性があるのかを把握する。

表2-6 性別・職業別収入階層

性別		専門・技術	管理	事務	販売・サービス	鉱工運通	農林漁業	家族従事	パート・臨時	無職	その他	合計
		男	200万円未満	1	0	0	3	6	0	0	1	8
200～400万円	6		1	0	9	19	3	2	4	20	1	65
400～600万円	13		4	4	4	18	0	0	0	8	2	53
600～800万円	10		5	6	6	12	0	0	0	1	1	41
800～1000万円	2		6	2	5	3	0	0	0	0	0	18
1000～1500万円	0		2	1	1	1	0	0	0	0	0	5
2000万円以上	0		0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
N・A	3		3	0	7	14	3	1	2	10	0	43
小計	35		21	13	35	74	6	3	7	48	4	246
女	200万円未満	3	0	7	10	3	2	6	38	52	0	121
	200～400万円	2	1	6	15	7	0	1	2	4	1	39
	400～600万円	1	0	4	4	2	0	0	0	0	0	11
	600～800万円	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	4
	800～1000万円	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	N・A	1	1	6	14	4	0	7	10	42	2	87
	小計	8	3	24	46	16	2	14	50	98	3	264
合計	43	24	37	81	90	8	17	57	146	7	510	
(構成比)	8.4	4.7	7.3	15.9	17.6	1.6	3.3	1.1	28.6	1.4	100.0	

(注) 収入は税込み、年金等を含む。女性の1000万円以上は該当なしのため省略。

表2-7 家族世帯別収入階層

	単身	核家族	二世世代同居	三世世代同居	その他	N・A	合計
200万円未満	9	7	1	0	1	0	18
200～400万円	5	48	3	0	2	0	58
400～600万円	6	64	6	11	2	0	89
600～800万円	1	43	5	13	2	0	64
800～1000万円	3	47	6	15	2	0	73
1000～1500万円	0	21	1	6	0	0	28
1500～2000万円	0	5	1	4	0	0	10
2000万円以上	0	3	0	2	0	0	5
N・A	21	104	8	33	5	21	191
合計	45	342	31	84	14	21	537
(構成比)	8.4	63.7	5.8	15.6	2.6	3.9	100.0

(注) 収入は家賃収入、地代収入等を含む。「核家族」は夫婦のみの世帯と、父子・母子世帯を含んだ夫婦と未婚の子どもの二世世代なる世帯である。「二世世代同居」の夫婦には片親の場合を含んでいる。

第2節 日本人住民同士の交流のあり方とその意識

アンケート調査によると、ほとんどの住民（96.1%）が他の住民とあいさつをかわすこと以上の交流をもっている（表2-8）。これはほぼすべての世代に共通しているが、世間話をしたり、家を行き来するようなより親密な関係に関しては、年齢が高くなるにつれてより多く存在し、この傾向は女性の中高年層において顕著である。たしかに先ほどみたように、男性のうち8割は職に就いていることから考えると、4割以上が無職層であった女性のほうが、日ごろ近隣とのかかわりをもつ機会が多いと判断できる。インタビュー調査でも、女性からは近所との交流に関する話題が多く聞かれた。以下はその事例である。

・「私はずっと家にいますので、車が乗れない方なんかが、車が1台しかないとか言って、どこ行きたいんだけどって、暇があれば必ず、私は乗っけて行ってあげます。だから、自分がしてもらいたいことは、必ず相手してもらいたい…から言うてくるんでしょうから、困ったことはできる範囲内ではやります。」(NO. 24/60代女性)

・「同年代のうちが多いのでおすそわけなんかもしますね。今はね、私と隣のうちは仕事に出ちゃっているのでもないんですけど、前はね、車で4軒でどっかでお茶のみしたりとか。」(NO. 318/30代女性)

・「今日だって、『そんなに子ども大きくなったん?』なんて言ってて。いつもこの隣のうちの子どもが泣くんだよねー。すごいいつも泣いてて、日本人の家庭なんだけど、『大丈夫かな』なんて、保育士なもんでね。(中略)『うちも年寄りが暇してるから、赤ちゃん連れてくるといいよー』とか言うて『はいー』なんて言うけどね。よかったなあと思ったんだけど。」(NO. 442/50代女性)

表2-8 近所の住民との交流（性別・年齢別）

性別		付き合いはない	あいさつをかわす	世間話をする	家を行き来する	N・A	合計
男	20～29歳	7	14	1	0	0	22
	30～39歳	1	21	11	1	1	35
	40～49歳	0	30	14	2	0	46
	50～59歳	1	27	32	5	1	66
	60～69歳	0	17	35	7	0	59
	70～79歳	2	7	12	5	0	26
	80歳以上	0	0	1	0	0	1
	小計	11	116	106	20	2	255
女	20～29歳	2	30	5	1	0	38
	30～39歳	2	23	10	3	0	38
	40～49歳	0	21	23	5	0	49
	50～59歳	1	13	38	6	0	58
	60～69歳	0	12	39	7	1	59
	70～79歳	1	6	9	13	0	29
	小計	6	105	124	35	1	271
合計	17	221	230	55	3	526	
(構成比)	3.3	41.6	43.8	10.8	0.6	100.0	

NO. 318の声の中にあるように、仕事をしてきた以前と、無職の現在とでは日中の交流の様子が違ってきていることがわかる。一方、男性のインタビュー結果からは、「あいさつをする程度」のかかわりにとどまっている様子が多く聞かれた。

・「遊びにいくってことはない。・・・同級生の人がいるものですから、そこところは、お茶飲んだりとかしますけど、それ以外は、回覧板をまわすとか、挨拶ぐらいで。」(NO. 148/60代男性)

・「(日本人住民との交流は)してません。不思議なんですよ。」(NO. 162/50代男性)

・「向こう(近隣の日本人住民)は、新興住宅だからね、あまりつきあいもしないようにね、意識しているみたいだよ、みんな。たとえば結婚式なんかね、するでしょ。そうすると、近所を呼ばないでくださいって言うの。なぜかという、前例になると困るっていうんだよね、新興住宅だから。だから、(新しい人たちは)つきあいが深くなると嫌だからって言うんだよね。わずらわしいと。新興住宅の方は。だから、道で会えばあいさつをかわす程度。そんなもの。」(NO. 14/60代男性)

NO. 14の声からは、近所の住民が比較的新しく引っ越してきた人々であることがわかり、土着の人々と移住者とはつきあい方が異なると考えられる。出身地の違いによる交流の違いは、以下表2-9に示される。

表2-9 近所の住民との交流(出身地別)

	付き合いはない	あいさつをかわす	世間話をする	家を行き来する	N・A	合計
大泉町	5	84	86	17	0	192
	0.9	15.5	15.9	3.2	0.0	35.6
群馬県	1	44	59	21	1	126
	0.2	8.2	10.9	3.9	0.2	23.4
関東	5	50	46	9	2	112
	0.9	9.3	8.5	1.7	0.4	20.8
その他国内	6	43	43	10	0	102
	1.1	8.0	8.0	1.9	0.0	18.9
外国	1	3	3	0	0	7
	0.2	0.6	0.6	0.0	0.0	1.3
合計	18	224	237	57	3	539
(構成比)	3.3	41.6	44.0	10.6	0.6	100.0

上記の集計結果からは、出身地によって交流の違いがあるといえない。「あいさつをかわす」と「世間話をする」程度の交流が約9割、「家を行き来する」ような親密な交流が1割弱であることは、国内のどこの出身者であっても共通している。では、実際に大泉町以外の出身者が、近所づきあいについてどのように感じているのか、インタビュー結果から検討してみたい。調査対象者のうち、群馬県以外の出身であった3名に注目する。

はじめに、大泉町に引越ししてきた当時に関して述べている。

・「最初来ましたときは、いずみの団地ってそれこそまったく団地生活でしたので、それで子どもが、上の子が生まれて、下の子が生まれたと同時に、こっち側に来たんです。でも、その時にやっぱり、土地を買う話しになったときに、やっぱり古い人がいるところは、よそ者扱いされるからやめた方がいいよっていうアドバイスは受けましたね。」(NO. 166/50代女性)

・「まず隣組の組長にあいさつに行って。で、あと正月、3日かな。必ずそう新年会っていうのがあるんだよ。で、新しく越してきた人は必ずあいさつに酒一本もって参加する。そういうところだったんだよ。この辺は古い、昔のメインっていうか中心だったから。俺なんか『よそ者』っていう風にみられたんじゃないかなって、俺なんか『よそ』からきたんだから。うん、最初はやっぱりそういう(よそよそしい)感じ。やっぱりこのへんは昔からのあれなんで、金持ち…金持ちか昔から土地持っているかなんで、そういうふうな意識はあった。なんか公民館に集まった時に、そういう人たちはそういう人たちで集まってるから。新しくきたやつなんかがそこに行っても、弾かれるっていうか、話なんか最初わかんない。」(NO. 73/60代男性)

・「私は正直言って最初は右も左もわからないで来たわけだからどうしようって…。主人は仕事行っちゃうからいいけど、子どもも学校行っちゃうし、残された私はどうなるの?みたいなね。けど田舎だからって思うんだけど、まず最初にあなたは何区で何組だから、あいさつ行ってくださいって町から言われて、行ったら組長さんがいて、ここの組だから一緒に回ってくれてっていうのがあって…」(NO. 163/50代女性)

3名とも、自身が「よそ者」であることを意識し、不安やうちとけにくさを感じていることがわかる。さらにNO. 166からは、地域住民にとけこめない時期の様子が語られた。

・「差別を一番感じましたのはね、選挙です。だんだんね顔古くなってきますと、住んで慣れてきますと、いろんな選挙のお手伝いするじゃないですか。この時に、お年寄りが出てきますよね、必ず。そすると、どこの生まれだとか、なんか結構いろいろ言われたりすると。3回選挙のお手伝いしたんですよ。やっぱり3回目はもう慣れてもう平気になったんですけど、2回目くらいはいやだったですね。なかなか。お前はここの住民じゃないみたいな、言われ方しますよ。お年寄りに。地元じゃなきゃ話しになんないみたいな。そういう意味ですよ。その選挙の時にね、やっぱりそういう扱いされます。やっぱり他から来てるってことは。大泉にずうっと住んでる者が一番だみたいな。」(NO. 166/50代女性)

また、NO. 73とNO. 163からは、引越ししてきて早々に、隣組の組長をはじめとしたあいさつ回りが義務づけられている様子がうかがえる。

このような「顔合わせ」を経て、新しく大泉町の住民になるが、近隣の地域住民とうちとける過程にはそれぞれにきっかけが存在していた。3名のきっかけのエピソードは以下である。

・「やはり、選挙でもいろんな方とお会いできたことが自分のここの。私は向こうから来てるから知らないじゃなくて、大泉に住んでるから大泉の人を知ってるっていうことは、すごくできてよかったと思いますね。え。(ご自身が積極的に外に出ているからでは?という問いかけに)それもありますね。おかげさまでね。ですから、結構ね皆さんね、地域の方ね、私に結構聞いてこられますよ。結構、だから(自身が外に)出てるから知ってるんじゃないかと思って。知ってるほうなんじゃないかな。いろんな方との交流も拒まないで、声がかかったら出るっていうのが、はい、ええ。」(NO. 166/50代女性)

・「たまたままあ、運動してたから。野球なんかやってたしソフトボールなんかもしていたから。公民館のスポーツの、その役員になった。まず公民館に入れば、いろんな人とつきあえるなと思ってそれで公民館に顔を出すようになった。それがきっかけで抜けられなくなっちゃって…ずーっとやって、15年くらいやってた。公民館に入って、地域の活動っていうか、そういうようになってから、会話もわかるようになってくるし、この地区の習慣もわかるようになった。今思うと、公民館活動やってたから、どこに住んでるどうい

う人だって、顔が全部わかる。顔がわかんないんじゃないさつもできないからなー。そういう点ではよかったよね。」(NO. 73/60代男性)

・「…すぐ近くで同じ組でお葬式があったんですよ。で、そのお葬式に手伝いに行って、すごくとけたってういか。私が来たときにお葬式出て、『〇〇さん (NO. 163) も来てすぐで大変だったね』って。うちの組はね・って。それをきっかけに、うちの組は全員でバーベキューするようになったんですよ。今年で12回目。私たちが来たときからはじまって。いまだ続いています。

やっぱり田舎の人だから正直いろいろ見てるわけでしょ？今日はだれだれさん来てたねーとか。どうしようって一時期思ったけど、『ありがとー。これでうちに変な人来てても安心ね。よろしくお願いまーす』なんてね。で、そのうちにナスができたよ、キュウリができたよってあちこちでもらうんで。おかげさまで助かってます。」(NO. 163/50代女性)

このように、何らかの具体的なきっかけから、群馬県以外の出身者も、現在では「よそ者」という立場を克服し、「大泉町民」として地域生活を送っていることがわかる。3名に共通しているように、積極的に地域の活動や行事に参加することや、近隣の住民の好意を受け入れていくことは、近所づきあいを円滑にするために必要であり、大きな意味をもっているといえるだろう。

また、NO. 163の回答からは、もともと大泉町に住んでいた人のほうから、移住者に声をかけたりお世話をする様子が見うけられる。第1節で、大泉町以外での居住を経験しているものが約半数いることを確認したが、「よそ者」を受け入れるホスト住民には、かつて自身が「よそ者」という立場を経験しているケースも少なくないだろう。「新しく来た人に対して気をつけていること」という質問項目には、以下のような意見もある（全体の回答に関しては表15を参照）。

・「…やっぱり知らないことがあるので、聞かれたらやっぱりね、いろいろ教えてあげるってことですよ。まあ自分から声かけてあげるっていうのが一番いいと思いますよ。」(NO. 361/50代男性)

・「そうだね、最初はね、わたしは、できるだけ、家庭に入り込むというか、こう、親切にしてあげましたね。…親切にしてあげたいし、お付き合いもしてあげたいし、と思いますけどね。」(NO. 402/70代男性)

以上はいずれも、大泉町以外の出身者の回答である。このように、かつて自身が「よそ者」であったときの苦労を考えると、大泉町では「よそ者」を排除するような志向が弱まってきているともいえるのではないだろうか。

では次に、行政区の活動への参加状況に関する集計結果をみると、「積極的」および「ある程度」の参加をしている者が64.2%と、過半数を占めている（表2-10参照）。年齢別にみると、20代女性は「あまり」、「まったく」参加しない者のほうが多くなっているが、それ以外の20代男性および30代以降の対象者は、「ある程度」の参加以上であることがわかる。70代以上の高齢者であっても、男女ともに行事に参加する傾向を示している。

さきほど、群馬県以外の出身者が大泉町民としてうちとけていく過程をみたが、周りの住民から「よそ者」という扱いをされなくなったきっかけに関しても、行政区や地域の行事や催し物への参加が鍵になっていたといえる。そこで、行政区の活動への参加状況を出身地別（表2-11）、転入世代別（表2-12）に示した。しかし、これらの結果をみると、出身地や転入世代によって参加の頻度に大きな差はみられず、特に大泉町以外の出身者で、自分の代に引越してきた者が積極的に行事に参加しているとはかぎらない。行政区における活動や行事は、単に大泉町民すべてに開かれた住民同士の交流の場にすぎず、その参加のしかたは、土着の住民と同じように大泉町以外の出身者にも浸透しているのである。すなわち、こういった行政区での活動の存在は、実際に「参加する」、

「参加しない」という個々人の意識の違いによって機能性がかなり左右されるものであるといえるだろう。ただし、事例からも示されたとおり、大泉町に移住してきた人々が地域住民と親しくなるためのツールとしては十分に有効性をもっており、開かれた活動の場をうまく利用することによって、「よそ者」は土着の人々とうちとけることができるのである。

さらに、近所との交流と行政区の活動への参加状況との関係について、表2-13に示した。近隣と「家を行き来する」ような親密な関係をもっている者は、57人中50名(87.7%)が「ある程度」以上に行政区の活動にも参加しており、逆に、近隣と「つきあいはない」と答えた18名中12名(66.7%)が、「あまり」もしくは「まったく」行政区の活動にも参加していない。「家を行き来する」ような交流をおこなう者は、それだけ大泉町民として地域に根ざした意欲的なライフスタイルであるといえるだろう。

また、表2-13の中で注目したいのは、近隣と「あいさつをかわす」程度の交流をもつ住民である。インタビュー調査の中でも、「あいさつをかわすことが近所づきあいにおいて大切である」という意見が多く聞かれたが(表2-14、表2-15参照)、行政区の活動に「まったく参加せず」と答えた64人中47名(73.4%)が、「あいさつをかわす」程度の交流であると答えている。このことから、一見、もっとも初歩的な交流と考えられている「あいさつをかわす」という行為が、それ以上に交流を深めるための「つなぎ」の役割をもっているとはいえない。つまり、あいさつをかわしているだけの関係では、お互いの間の距離は常に一定に保たれたままであり、相手との関係は、親密になることも疎遠になることもないのである。以上のように考えると、真の意味で交流しているというためには、「あいさつをかわす」ことから一歩進んで、近隣の住民たちと会話をしたり、行政区の活動に足を運ぶ等、みずから積極的に行動を起こすことが必要ではないかと考えられるのである。

表2-10 行政区の活動・行事への参加状況(性別・年齢別)

性別		積極的に参加する	ある程度は参加する	あまり参加せず	まったく参加せず	N・A	合計
男	20～29歳	1	4	9	8	0	22
	30～39歳	2	15	9	8	1	35
	40～49歳	7	24	13	2	0	46
	50～59歳	13	33	16	3	1	66
	60～69歳	17	30	10	2	0	59
	70～79歳	7	15	3	1	0	26
	80歳以上	0	1	0	0	0	1
	小計	47	122	60	24	2	255
女	20～29歳	0	7	8	23	0	38
	30～39歳	4	22	7	5	0	38
	40～49歳	7	31	7	4	0	49
	50～59歳	5	30	20	3	0	58
	60～69歳	11	34	12	2	0	59
	70～79歳	6	16	5	2	0	29
	小計	33	140	59	39	0	271
合計	80	262	119	63	2	526	
(構成比)	14.8	49.4	23.0	12.1	0.7	100.0	

表2-11 行政区の活動・行事への参加状況（出身地別）

	積極的に参加する	ある程度は参加する	あまり参加せず	まったく参加せず	N・A	合計
大泉町	30	92	43	26	1	192
	5.6	17.1	8.0	4.8	0.2	35.6
群馬県	20	67	26	12	1	126
	3.7	12.4	4.8	2.2	0.2	23.4
関東	15	53	30	12	2	112
	2.8	9.8	5.6	2.2	0.4	20.8
その他国内	15	52	23	12	0	102
	2.8	9.6	4.3	2.2	0.0	19.0
外国	0	3	2	2	0	7
	0.0	0.6	0.4	0.4	0.0	1.3
合計	80	267	124	64	4	539
(構成比)	14.8	49.5	23.0	11.9	0.7	100.0

表2-12 行政区の活動・行事への参加状況（転入世代別）

	積極的に参加する	ある程度は参加する	あまり参加せず	まったく参加せず	N・A	合計
自分の代	43	123	59	21	1	247
	8.0	22.8	10.9	3.9	0.19	45.8
親の代	9	46	21	21	1	98
	1.7	8.5	3.9	3.9	0.19	18.2
祖父母の代	9	34	11	9	0	63
	1.7	6.3	2	1.7	0.0	11.7
祖父母より前	19	56	32	8	0	115
	3.5	10.4	5.9	1.5	0.0	21.3
N・A	0	8	1	5	0	16
	0.0	1.5	0.2	0.9	0.4	3.0
合計	80	267	124	64	4	539
(構成比)	14.8	49.5	23.0	11.9	0.7	100.0

表2-13 近所の住民との交流と行政区の活動・行事への参加状況の関係

	付き合いはない	あいさつをかわす	世間話をする	家を行き来する	N・A	合計
積極的に参加する	2	10	46	22	0	80
	0.4	1.8	8.5	4.1	0.0	14.8
ある程度は参加する	3	95	141	28	0	267
	0.6	17.6	26.2	5.2	0.0	49.5
あまり参加せず	5	72	41	5	1	124
	0.9	13.3	7.6	0.9	0.2	23.0
まったく参加せず	7	47	8	2	0	64
	1.3	8.7	1.5	0.4	0.0	11.9
N・A	1	0	1	0	2	4
	0.2	0.0	0.2	0.0	0.4	0.7
合計	18	224	237	57	3	539
(構成比)	3.3	41.6	44.0	10.6	0.6	100.0

表2-14 近所との交流に関して前提となること（対日本人住民）

NO	年齢・性別	出身地	インタビュー回答
14	60代男性	外国	今のおりで、あんまりしない方がいいんじゃないの、特に（笑）。
24	60代女性	国内	やっぱり、相手が困ってることがありますでしょ。困ったこと言ってくる時は自分ができることは必ずやってあげるっていうこと。どんなことでも。相手の嫌なことはこう、見ないってこと。あんまり。深く短くお付き合いしていく感じですね。
45	60代男性	大泉町	…行事を中心にね。例えば、ここなんか、夏祭りが、大泉祭りが、だいたい、7月の下旬に開かれるんですけど、結局、まあ、子ども御輿、あるいは山車なんかだと、やっぱり、子どもが結構参加してますからね。まあ、そういう行事を中心に、いろんな交流が。
73	60代男性	国内	まず、自分でとりこんでいくことなんですよ。隣組。あとこの地区の公民館とかあるから、そこに顔出すようにすれば、地域の人の顔がわかるようになってくるから。割合短期間で、地域の内容がわかってくる。
127	30代男性	大泉町	付き合いがないから。
148	60代男性	大泉町	日本人でもやはり、ああこの人、私と話が合うかなとか、どこそこわかるじゃあないですか。それであの、駄目そうな人は、道で挨拶するくらい。あと、その辺に、花がきれいねなんていえば、ねえ、苗をやるとか。そんな辺の話で。
162	50代男性	大泉町	お互いに人間であるってことを考える、ってことじゃないですかね。…僕は、いつもね、ヤクザもそうなんですよ、よくお風呂に行くとお刺青の方お断りってあるでしょ、あれは偏見ですよ。あんなの、どうでもいいことじゃないですか。
163	50代女性	国内	まず挨拶でしょうね。日本人でもよくだれだれちゃんは挨拶しないって話題になるからね（笑）。そういうちょっとしたことですよ。
166	50代女性	国内	やっぱり思いやりじゃないですかね。
208	40代男性	国内	だから挨拶というより、どう言うのだから、なんかのきっかけでしょうね。始まるっていうのは。
318	30代女性	大泉町	特別なことしなくても、最低限のルールとかマナーとか。ゴミ出しのルールとか。最低限の生活マナーを守っていれば、普通にしていれば、なんてことないのかなあって思いますけど。
360	70代男性	国内	（何が）必要とかではなくて自然に。その場その場でどういうことをしなければとそんなことを考えていたら息が詰まってしまうでしょ。会えば、おうって話しをするし、別に訪ねて行ったり、訪問というのはあまり無いわね。会えば話しをする、普通と同じじゃない。
361	50代男性	国内	挨拶から初めて、徐々に会話ができるようになることだと思いますね。
400	50代男性	群馬県内	最低限、あいさつですよ。きちんとあいさつができれば。基本ですよ。あとは、隣近所に迷惑をかけない。
402	70代男性	国内	なんか、わたしの考えでは、年に何回かは、必ず、みんなで顔を合わせる…て、情報交換ができるような、ことをね…。
403	60代男性	大泉町	やはり、協力性ではないかなと思っているのですよ。隣組長さんが、大体は音頭をとって、特にここは、年1回親睦を図るわけですね。
404	60代男性	国内	人の家の詮索をしないことだろうね。だから、人に迷惑をかけないようにすることが、大事なんだけど…なかなか。まあ、前提条件っていうのは、迷惑をかけないことでしょうな、少なくとも。そう心がけてますよ。
442	50代女性	大泉町	やっぱり、今日道路清掃があったからじゃないですけど、本当に基本的な決め事みたいのがあるでしょ？ゴミはこの日に出すとか。そういう最低限のことは守ってほしいというか。
446	60代女性	群馬県内	どういうことっていうか、公民館活動なんかがあるときにみんな集まってくるんで、そういうお付き合いですか。あとはボランティア。施設に行くと老人のお世話したり。

（注）この表では、「特になし」とだけ答えた場合や、事情により質問されていない場合の対象者（5名）を除いている。

「出身地」の「群馬県内」とは、大泉町以外の出身者である。「国内」とは、群馬県以外の出身者をさす。

表2-15 新しく来た人との交流において気をつけていること（対日本人住民）

NO	年齢・性別	出身地	インタビュー回答
14	60代男性	外国	私も閉鎖的だから、どっちかという。あんまり人とお付き合いしたくない方だから(笑)。特にない。
73	60代男性	国内	特別なない。まあ、あたらしいところ来てみるとさ、わかんないからさ。不安を感じて。周りの人と距離を置くから。そういうことのないようにこっちでね。
127	30代男性	大泉町	(特にはない?) そうですね、別段、身構える必要もないし…。
148	60代男性	大泉町	やはり、ゴミとか。前も、前に越してきた人は、これ分別どうするんですかととか。ゴミステーションであれば、これこれこういう風に、するんですよとか。それくらいですよ。あとは、ご挨拶とか。
163	50代女性	国内	困ったことがあったら教えてあげるとか? お店とかね。あとお子さんがいるんだったら学校のこと。学校のこと大きいですよ。
166	50代女性	国内	日本人にはっきりものを言っちゃうとだめですよ。大変ですよ。こちら辺は若い世代がいますので、若い世代の方は適当に、あんまり深く入らないように。おせっかいばあになりやすいんで。
208	40代男性	国内	どういう価値観を持った人間なのかね、それは分からないでしょ、会っただけじゃ。だって日本人だっていますからね、変なのが。
318	30代女性	大泉町	別に考えたことはないですね。でも、お子さん何歳くらいかなあって、ウチのこと同じくらいかなあって…
359	70代男性	群馬県内	特に意識したことはありませんね。
360	70代男性	国内	別に気を付けもしないし普通よ。人間対人間だから。
361	50代男性	国内	…やっぱり知らないことがあるので、聞かれたらやっぱりね、いろいろ教えてあげるってことですよ。まあ自分から声かけてあげるっていうのが一番いいと思いますよ。
400	50代男性	群馬県内	…自分から、やっぱり、相手にそうしてほしいのは、自分から、元々いた人たちのなかへ入ってくるわけだから、入ってきた人が、触れ合ってもら。最低限、そのくらいは必要かなって。
402	70代男性	国内	そうだね、最初はね、わたしは、できるだけ、家庭に入り込むというか、こう、親切にしてあげましたね。…だから親切にしてあげたいし、お付き合いもしてあげたいし、と思いますけどね。まあ、それを望まないですね、周りね。
403	60代男性	大泉町	別にないです。自然そのままです。会って、ああ今度来た方ですかと挨拶するくらいで。
404	60代男性	国内	表14の回答と同じと述べている
442	50代女性	大泉町	今日道路清掃でね…30分遅れで参加してまいりました。確かに、春と秋の道路清掃ぐらいじゃないと、4軒揃って出てくることなんてないし、本当に道路清掃なんかはチャンスですよ。

(注) この表では、「特になし」とだけ答えた場合や、事情により質問されていない場合の対象者(8名)を除いている。

「出身地」の分類に関しては表14の注に同じ。

これまで、日本人住民同士の交流のあり方を見てきたが、大泉町全体に対して、日本人住民が抱いているイメージは表2-16のような結果となる。

表2-16 大泉町について感じていること

	とても そう思う	ある程度 そう思う	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない	合計
住民間のまとまりが強い	33	199	208	95	513
	6.4	38.8	40.5	18.5	100.0
新しく来た人でもなじみやすい	20	159	233	95	507
	3.9	31.4	46.0	18.7	100.0
昔からの文化・習慣を大切にす	56	205	184	59	504
	11.1	40.7	36.5	11.7	100.0
住民同士の接点がない	142	223	91	46	502
	28.3	44.4	18.1	9.2	100.0
昔から住んでいる人の意見が強い	8	48	282	163	501
	1.6	9.6	56.3	32.5	100.0
新しいものを積極的に取り入れる気風がある	197	207	90	21	515
	38.3	40.2	17.5	4.1	100.0

いうまでもなく、外国人移住者を積極的に受け入れてきた大泉町に対して、「新しいものを積極的に取り入れる気風がある」と感じている者が8割弱を占めており、その結果、「昔から住んでいる人の意見が強い」とは感じない者が9割弱存在する。しかしながら、「新しく来た人でもなじみやすい」と感じていない者が6割を占めていることは、町レベルでは受け入れの態勢を示しつつも、住民の意識レベルではフレキシブルに移住者を受け入れられていない状況もみられる。ここには、外国人住民との関係だけでなく、日本人住民同士の関係も強いとはいえない現実が影響しているのではないだろうか。「住民同士の接点がない」と感じる者が72.7%、「住民間のまとまりが強い」とは思わない者が59%というデータからも、個々の住民もしくは家庭単位で、周りの人々との接点が少ない地域性であることが浮き彫りになっているといえるだろう。

大泉町における日本人住民の地域生活について考察してきた。これまでの結果を改めてまとめると、以下の四点となる。

まず一つ目に、大泉町に移住してくる者は、日本人であっても、引越し当初は自身が「よそ者」であるという意識をもち、なかなか地域生活になじめない期間を経験していることがわかった。

二つ目に、地域住民全体の傾向としては、「あいさつをかわす」程度の交流が主流であり、近隣とのどちらかといえば疎遠な関係の構図が浮かび上がった。

しかし、このような関係を打破するツールとして、行政区の活動のような交流の機会が用意されており、このような機会を効果的に利用することで、「よそ者」であっても地域になじんでいくことは可能であり、より親密に住民同士が交流をもつことができるというのが三つ目である。

そして最後に、大泉町には日本人の移住者も半数近くを占め、かつては自身が「よそ者」という立場をそれぞれに経験している。土着の人々のほうが少数派となりつつあるのである。このことを前提にすれば、住民の意識は「よそ者」を受け入れるほうへシフトしつつあり、今後の住民同士の交流の展望はよいといえるだろう。

(菊地千夏)